
ノウエンド・クロニクル

リアン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ノウエンド・クロニクル

【Nコード】

N47540

【作者名】

リアン

【あらすじ】

1000年前に巻き起こった二つの魔術大国による大戦。その決戦の地は使用された大規模殲滅魔術の余波により歪みを生じ、「禁域」として6人の魔法使いによって封印された。ある日、その禁域の結界に揺らぎが生じる。その原因を調査するべく魔法使いの一人・アスタエルの弟子、ヤツキは、一人のホムンクルスを伴って旅に出る。

プロローグ 歪みの始まり

夜に入る直前の、静かな青黒い空。

眼を覚ましたかのように、ぽつぽつと星たちも姿を見せ始めていた。

時は秋の終わり。

少々肌寒くなってくる頃だ。

渡り鳥の群れが翼を連ねて、いつもの年のように、南へとわたっていく。

それをのんびりと眺めながら、ささやかな平和をじっくりと味わうように、魔法使いは暖かいココアをゆっくりと口に含む。

「いやあ、平和だねえ」

その平穏を打ち破るように。

突如、地上から赤い光の柱が勢いよく吹き上がった。

「おうっふ!?」

ビビった魔法使いは思わずココアを噴出した。

同時に、マグカップも取り落とした。

が、彼は全くそれに気づいた様子は泣く。

「ちょ、何アレ!」

そんなことを気にしている場合ではないと言わんばかりに、魔法使

いは手すりに腹を乗せて身を乗り出した。

不吉を予兆するような、禍々しい赤い光の柱。

それを一通り凝視した後、その根元へと視線をおろす。

―光の柱、禁域に刻まれた魔法陣の頂点の一つから、噴出していた。

「禁域が、揺らいでる…」

いつもな夜の闇のしたでも弱弱い光しか発しない筈の禁域の魔法陣もまた、同調するように、強く発光していた。

ひとしきり睨んだ後、魔法使いは険しい表情できびすを返す。

と、床にこぼれ落ちたと、割れたマグカップを見て、顔色をさあつと青ざめさせた。

「…どうしよう。ヤツキに怒られる」

第一羽 まだまだ落下中

「くっ！！！！」

垂直落下を続けながら、少年は悔しそうに歯噛みした。

「クケエエエ！！！」

その脇を、奇声を上げながら俊敏に翔け抜けるのは、1頭の中型の赤茶色のドラゴン―ワイバーン。中型の竜種だ。

上だ。

己の直感に従い、少年はすばやく体を反転させ、空を見上げる形になる。

同時に、両手の2丁の愛銃の引き金を躊躇なく連続で引き絞った。

ガウンガウン、と銃声が怒りの咆哮をあげるように響き渡る。

音速で飛び出した圧縮された魔力の弾丸は、一発がワイバーンの頬を掠めただけで終わった。

もう一度二挺の銃の引き金を引く。が、二挺とも、がちん、と情けない音を立てた―弾切れ、だった。

「ちいっ」

少年は舌打ちする。

無理も無い。支えも無い中空で、すばやく自在に飛び回る竜を狙い撃ちする事自体が、至難の業なのだ。

しかし、悠長にしている暇も無かった。

現在、少年は超高速で地上に向かって落下中だ。翼が片方しかない彼は、飛ぶ事が出来ない。

重力制御の魔法を展開しなければ、地上に激突して即死してしまう。

しかし、ワイバーンが居る状況で、下手に落下速度を緩めれば、それこそヤツの餌になってしまう。

彼がワイバーンに捕まらずに居るのは、皮肉にも、その落下のスピードのおかげなのだった。

「ケエエエツッ!!」

「げえっ！」

どうしようかと考えていると、ワイバーンが、翼をたたんで、ダイビングする形で少年に向かって突っ込んできた。

玉切れを悟り、正面から襲い掛かってでも安全だと判断したらしい。

大きく開かれた顎。その淵にそって、ずらりと並んだ、黄色身がかかった鋭い牙。その奥から、肉厚の、真っ赤な長い舌が獲物を求めるように伸びている。

このままだと、食いちぎられるぞ。

そう直感すると同時に、頭のもう一方で、別の考えを持っている自分もいた。

今がチャンスだ。

少年は、後者の声に従った。

恐怖に逃げようとする体を知ったし、あえて少年は回避の体制をとらない。

ギリギリまで、ひきつける。

相手は翼がある。此処で逃げられたらもうチャンスは無い。地上までの距離は、もういくばくも無いのだ。

「クケエエエエー！！！！」

ワイバーンの、獲物を捉える瞬間の狂喜の叫びが響く。

その鋭い牙との距離が、2mを切り、鋭く縦に裂けた細い瞳孔が肉眼で捉えられるようになった瞬間。

少年は、両手を交差させて突き出し、叫んだ。

「…エクスプロージョンッ！！！」

詠唱と同時に、翼に、全身に、千切れるような、激しい痛みが走った。

羽人にとって重要な魔力制御器官でもある翼を片方しか持たない少年にとって、補助魔法器を用いずに魔法を使うのは難しく、また、大きな負担だった。

それでも、片方の翼と意思の力とで、暴発しようとする魔力を、無理やりねじ伏せ、イメージへ反映させる。

演算もへったくれもない。ただ、形へと持っていく。

ワイバーンとの距離が、残り1mを切った。

同時に、少年の交差された両手の平に、白い炎が宿り――

ズドオオオオンッ！！！！

「ギャアアアアッ！！！！？？？？」

ワイバーンの断末魔の悲鳴は、鼓膜を破らんばかりの激しい爆音にかき消された。

だが、超至近距離で魔法を放った少年も無事ではなかった。

「があっ！？」

両腕に走る鋭い痛み。

爆発による火傷や、衝撃波による裂傷で、酷い事になっていた。

それでも、少年は――

「だ、れが、諦めるかああっ！！！！」

己を奮い立たせるように叫び、翼を大きく広げ、両腕を再び突き出す。

魔力を宿した翼と両腕が淡い紫色の光を帯び、次の瞬間、同じ色の光で魔法陣――重力制御の魔法が展開された。

落下速度が、わずかに落ちる。

だが、安全に着地するにはまだまだ早い。

再び全身を貫く痛み。しかも、今度は着地まで魔法を維持するとあって、その痛みも尋常ではない。

じつとりと額に汗を浮かべながら、それでも少年は、笑っていた。

「絶対生きてついてやるんだ…!!」

―誇り高く、天使は堕ちてゆく。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4754o/>

ノウエンド・クロニクル

2011年10月7日23時20分発行